



学ぶと真似ぶ

金沢工業大学高度材料科学研究開発センター
所長・教授

金 原 繁

“学ぶ”という言葉は“真似ぶ”に由来する言葉だそうである。学ぶとはすなわち真似をすることなのである。それにもかかわらず、現在、われわれの住む社会では一般に学ぶことは美德であり、真似をすることは悪徳とされている。

ここでは、真似は本当に悪徳かということを少し考えてみたい。

われわれが社会で生活し、さらに社会や子孫のために何らかの貢献をしようとするならば、家庭や学校、親や教師からいろいろのことを学ぶ必要がある。それは突き詰めて考えれば、先人や同時代の自分より優れた人たちの考えや行動を真似することではないか。幼児の行動は親の行動の真似から始まるはずである。だから、真似は悪徳ではなく、人間にとってきわめて自然の基本的、常識的行動形態なのである。

“真似”のアンチテーゼとして、“創造性”という言葉が大きく取り上げられるようになったのは第2次世界大戦終了後、つまり1945年以降のしかもかなりあとのことではないかと思う。

それまでは、ほぼ同様の意味で創意工夫が用いられていた。意味は類似しているが創造性というと、何となく大げさで、時に威嚇的響きさえ持つ

ので、率直に言えばこの言葉を私はあまり好まない。あるテレビのシーンで、保険会社の部長が外交員の女性を集めた朝礼で、「創造性を持って契約獲得に取り組んでください」と絶叫しているのを見てひどい違和感を持った。なんでも創造性と唱えればよいというものでもないであろう。

この創造性という言葉は、もともとは独創性に富んだエンジニアが、日本の現状を憂えて強調し出したのだと思うが、それに言葉売ることを業とする一部ジャーナリストが飛びついて多用し、ついには手垢まみれにしてしまった。私自身はエンジニアでないが、エンジニアが日本の現状に対して創造性を強調するのはある程度わかる。しかし一部のジャーナリストが日本人の非創造性を持ち出して日本人を非難するのには、同意しかねる。私は確信しているのだが、現代工業技術に関する限り、少なくともアジア諸国の中では日本がもっとも創造性に富んだ国であり、もっとも独自の技術を開発している国である。アジア諸国の訪問で、“日本は創造性がない真似ばかりしている国”などという台詞（せりふ）を聞くことがある。この台詞自体が実は日本のジャーナリストの受け売りで、日本その他から導入した技術以外、何の独自

巻 頭 言

技術もない人達からそんなことを言われるのは笑止千万であるが、一方でそれほど創造性にこだわる日本のエンジニアやジャーナリストに、創造性とは何かを問いかけてもみたい。というのは私のようにどちらかといえば自然科学畑の人間の間では、創造性ということがエンジニアほどは話題にならないからである。自然科学にももちろん創造の巨人と呼んでよい人たちがいる。ニュートン、アインシュタインをあげれば十分であるが、もっと身近なところで中間子論の湯川秀樹、線形応答理論の久保亮五をあげてもよい。たとえばニュートンの業績を考えてみよう。かれが初めて認められた業績は反射望遠鏡の発明であるが、もともと屈折望遠鏡はすでにガリレオが用いて木星の衛星や土星の環の観測をしている。この種の発明には類似した研究もあり、全くの無から生まれたわけではない。力学の法則にしても、コペルニクス、ティコ・ブラーエ、ガリレオ、ケプラーを始めとする多くの天体観測者達の研究と観測の集積があった。それらの実績をもとに万有引力の法則が導かれたのであり、その逆二乗法則についてもR.フックとの間に先取権論争があった。ニュートンはいわば多くの自然哲学者の構成するピラミッドの頂点に位置しているのであって、一人だけで孤高を守っていたわけではない。彼は他の研究者の仕事を十分に理解し、それらの中から法則性を見出すというゼネラリストの役割を演じている。彼の主たる論文を読んでもみると、創造という言葉は見あたらず、ひたすら実験と考察あるのみである。巨人達にとって創造性は他人がする評価であり、自分でいう必要のないものであった。

ニュートンのような17世紀の自然哲学者の世界

と21世紀のエンジニアの世界に違いがあるかもしれない。少なくとも今の世界の方が情報の伝達が早く、他人との相互作用がいやでも強くなっている。エンジニアにとっては先取権が本人や会社の利益に直接結びつくので、先取すなわち創造が大事なことは分かるが、今の若いエンジニアたちに独立独歩、他人と無関係にただただ創造的であれというのは、足かせをはめるに等しく、本人にとっても、社会にとってもあまりプラスにならないのではないかという気がする。むしろ本人がやりたいことをやりたい方法で存分にやらせる方がその人の力を効果的に発揮させられるのではないだろうか。それがたまたま独創的、創造的であるかもしれないし、猿まねに近いことになってしまうかもしれないが、真似の出どころを明らかにするという最低のモラルさえ守れば真似もその人の能力として尊重してよいことである。もともと真似ということは似せることであって、全く同じものを作ることではない。手作りで全く同じものを作ることは不可能に近く、逆に個性や独自性が不可避免的に現れてしまうものである。創造と真似との間は連続スペクトルであってどちらかの二者択一ではないのである。

創造性論議が喧(かまびす)しいおり、工学部における創造性育成教育にお手上げ状態の教師の弁解になってしまったかもしれないが、多かれ少なかれ人間は学ぶことで真似をする。ただし、他人の仕事をヒント程度にする人間からコピーに近いものを作ることが得意な人間までいろいろの種類があり、すべての人間に画一的に完全な創造性を押しつけるのは、かえって人間の潜在的な能力を押さえつけてしまうおそれもあるという感想を持つ。